

「井筒」は作者の世阿弥自身が「上花なり」と評するトップレベルの自信作だそうで、昨今も名作として誉れ高い曲です。けれど観世喜正さんの楽しい解説によれば「能に慣れていない人が観たら、死ぬほど退屈で、東京から名古屋に行けるくらい熟睡出来ます」([演目別にみる能装束]より)。また私が聞いたことがある冗談でも、この能を観たフランス人がその退屈さに驚いて囚人の罰に向いていると言ったとか。私自身も今まで3回ほど観ましたが、寝てしまった訳ではありませんが、他の能に比べて断トツという実感はなく、何故だ！（私が初歩）と心密かに感じていました。しかし前出の喜正さんの言葉を続けると「能に興味が出てきたという方は、ぜひ挑戦して下さい。退屈な曲なのか名曲なのか。この能から何を感じることができるのか」と…。

そこで私は今回鏡仙会講座『能との新たな出会い』-世阿弥作「井筒」をめぐって一という能公演を含む全4回(8月26日～9月16日)の催しに参加し、「井筒」の魅力をとコト研究する気になりました。講座はなかなか充実した内容で、主に表きよさんの解説や井筒に関連する実技や作り物について等多角的にテーマが取り上げられていて興味深いものでした。

「井筒」は伊勢物語を出典として幼友達だった在原業平と紀有常の娘との恋の成就。業平の浮気とその後の夫婦の仲直りが和歌を織り込んで物語になっていることは周知のとおりです。今回は様々な予備知識に加えて、私に関しては謡曲としてお稽古を受けた後ということもあって、以前に比べかなり気合を入れて観てまいりました。演能は9月9日宝生能楽堂。シテ・観世清和、ワキ・宝生閑、地頭・浅見真州。笛・一噌仙幸、小鼓・幸清次郎、大鼓・國川純、アイ・山本泰太郎で立ち見(?)が出るほど満席でした。

まずワキ謡が凄いな芸で、お囃子も素晴らしく聴いているだけで気分が高揚してきます。そこで揚幕。シテがずっと立つ楚々としたたずまいに胸がキュンとする程のときめきを覚えました。いつも良い能は不思議とこの瞬間に、はや演者と観客がビシッと一体感が持てるような気がします。面は「相生増」で人妻のしっとり感が出て艶めかしく、橋掛を進む清和師の運びは絶品。見ているだけで優雅な気分が漂い、なるほど幽玄って醸し出される雰囲気なんだと納得しました。まもなく常座でシテ謡。これが男声らしく、実にしっかりとした謡い方で意表をつかれました。前場より後場の方がややトーンが高く少し女っぽさを感じましたが、総じて気の入った謡い方で、歌舞伎の女形とは能は根本的に違うんですね。

退屈の代名詞の居グセも、私自身、地謡に関心が深まっているので面白く、かさ張る唐織で長い時間下居(立ち膝)は能楽師にとっても苦痛だそうですが、清和師はまるでそれを感じさせない美しい形を保たれ、その端正さに目が吸い込まれて退屈どころではありませんでした。そして後場。業平の装束を付けての序の舞は美しく、久しぶりに心から堪能する見事な舞でした。井戸に付けたススキも、この季節だけの本物で情感を一層高めていました。

以前聞いた三宅晶子さんの説では井筒の女は、夫の浮気にオタオタしない自立した女で、世阿弥の好みであり、逆に求塚の女のように決断ができず主体性のない女は余り好きでないから地獄に入る終末にしてしまったとか。いづれにしても前場では知的で健気な井筒の女も、後場では業平の面影に懐かしさと愛おしさを隠しきれないところに女の魅力があることは間違いありません。だから井戸を覗く場面がクライマックスになる由縁でしょう。

世阿弥の評する「上花」の花は幽玄であり、幽玄とは例えば、たおやかな女性が醸し出す華やかさ、美しさとか。「井筒」は確かに悲劇でもなければ、喜怒哀楽の激しいものでなく、動きもなだらかなので退屈とも言えるかもしれないけれど、演者の技量でここまでも観客の心を掴むのですから能の醍醐味とも言えます。ちなみに世阿弥が傑作と思った割には室町時代からずっと長い間人気がなく、演能回数も極めて少なかったのを名優・観世寿夫さんが、この曲を再発見し素晴らしい演能をされたことによって、「井筒」は名曲という定説になったことは、実はつい最近のことだとも知りました。(尾崎純子・記)